

地 方 茶

—宮城の茶—

泉 敬 子・石 崎 弘 子

A Study on the Tea

—produced in Miyagi area—

Keiko Izumi・Hiroko Ishizaki

日本における茶の産地は静岡、宇治、狭山などが知られているが、このほか多くの地方で特有の茶の栽培が行われている。

もともと茶は寒い地方には生育しないとされ、茨城県と新潟県とを結ぶ線以南が経済的北限といわれて来た¹⁾。しかし近年は栽培法その他に工夫が考えられ、北海道の一部でさえ、栽培されるようになった。

著者の一人はさきに広島、熊本、愛知(西尾)等の茶について調査を行い報告したが、²⁾³⁾今回は寒冷地の茶について、その栽培の歴史、実態、今後の発展性等を知る目的で本研究を行った。その一つとして宮城県の茶について調査を行ったので報告する。研究方法は文献による調査のほか、現地にて聞き取り調査を行った。

1. 宮城県の地理的、歴史的環境

宮城県は東北地方の東部に位置し、西は奥羽山脈を県境にして山形県に接し、北の一部は秋田県に接しているが、大部分は北上川中流の一関台地南端付近で岩手県に、南は阿武隈高地北部で福島県に接している。東は太平洋である。面積は約7286km²、人口約175万である。⁴⁾

気候は仙台で平均11°C位である。冬季の季節風は西の奥羽山脈のため著しく乾燥し、夏季は南東風によって高温多湿となる。⁴⁾

次に宮城県の産業についてみると、古来より水田農業一辺倒といってよい程であり、米が財政的基盤となっていた。米以外の物産も種々あったが、ほとんどが領内の自給をみたす程度であった。

2. 宮城の茶の変遷

① 宮城県全般について

宮城県における茶の栽培については次のような記録があるところより藩政時代にはすでに各地に茶が栽培されていたことが分る。即ち『仙台鹿の子』によれば「お茶畑はむかしお茶畑ある故にいふ。お茶畑は寛文11年(1671)から茶の木を植えはじめ、享保8年(1723)まで53年間に成った。」と記されている⁵⁾。そして各地の特産物として税の対象になっていた。

又、『宮城県史2』には、仙台藩の産業として茶について次のような記述がある。

〈仙台領で茶を栽培した起源は明かでないが、寛永検地の際、茶畑を上上、上、中、下、下の五等に分ち、それぞれ銘付けしたことは

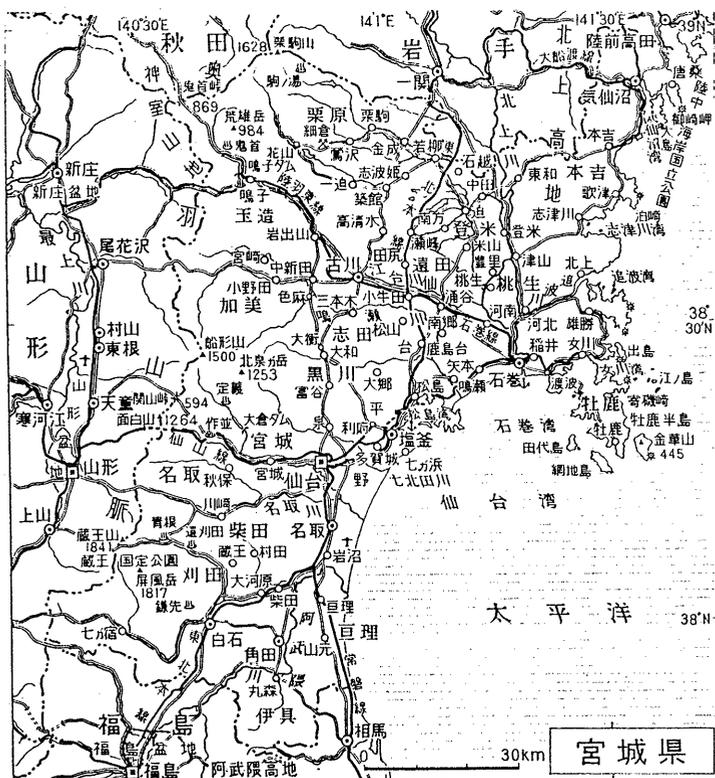


図1 宮城県

(世界大百科辞典：平凡社より)

すでに述べた如くであり、また各地の検地帳を見ても、茶畑が記載されているところから考えると、茶は領内で一般に栽培されたことが知られる。

『貞山公治家記録』に、「慶長18年(1613)3月10日、細川紹高老へ御書ヲ以テ御茶半五袋進ゼラレル」とあり、また「元和6年(1620)8月17日、柳生又衛門殿へ山寺茶一壺進ゼラル 山寺茶ハ 宮城郡七北田竜門山洞雲禪寺ヨリ出ヅル佳品ナリ」とあり、仙台領産の茶は早くから伊達家の贈答品に用いられた。

『封内土産考』には仙台領の茶の主産地として黒川郡富谷、成田、明石の近村、伊具郡高蔵、稲置、毛萱、小田、刈田郡津田、小奥、犬卒都婆、桃生郡大田等をあげ、また藩政前期には国分七北田村大沢よりも多く茶を産し

たという。明和3年(1766)十一月、黒川郡吉岡町の茶製造家菅原屋篤平治は銘茶5種を京都の九条家に献じ、5種の茶銘を与えられた。

幕末になって、藩主慶邦は国産奨励の上から、山城国宇治の上杉三八からなる者から茶種を取り寄せ、牡鹿郡石巻牧山および飯野川地方に栽培せしめ、「国産方」で藩直営の事業としてから、茶の生産も増加した。しかし、仙台領における茶の生産領はおおむね領内の需要をみたす程度で、他領輸出によって利を得るまでには至らなかった。>⁶⁾以上のような記述より江戸時代初期から茶の栽培が行われ、税や贈答品の対象となっていたことが分る。

因みにわが国の茶貿易の変遷をみると、安政6年(1859)横浜、長崎、函館の三港が開か

れ、海外貿易が開始され、茶は生糸に次いで輸出品の主たる地位を占めていた。

横浜からの生糸と茶の輸出货量と金額は表1の通りで、生糸が総輸出額のはぼ50~80%、茶がはぼ5~15%を占め、生糸と茶で総輸出額の大部分を占めていたのである。

当時の茶の輸出先はイギリス向けが多く、その大部分はイギリスを経てアメリカへ再輸出されたといわれ、慶応以降は直接アメリカへ向けられた。

このような事実が仙台藩の殖産興業を考える場合に影響を与えて来たものであろう。

更に明治に入ってから表2の通り20年頃まで茶の輸出は大きな役割を果たしていた。

次に明治初期から現在までの茶栽培面積、荒茶生産量(10aあたり)について述べる。以下のグラフの数値は農林省統計情報部から毎年刊行されている『茶統計年報』によるも

のである。

表3、図2、図3のグラフから、宮城における茶づくりは、明治時代を頂点として衰退していることが分る。昭和18~27年まで、特にグラフが下降しているのは、第二次世界大戦の影響である。しかし、30年の初めにははぼ戦前の状態に戻っている。全国的にみると18~22年まで下降をたどり、その後、輸出不振、生産過剰、不況などの影響で伸び悩んでいたが、後、国内消費の伸びにより生産は増加を続け、昭和50年代には全国で10万トンを超えている。

一方、宮城県では昭和33年以降43年までは上昇を続けたが43年以降は生産量は減少の一途をたどっている。これは静岡などの茶の生産地が著しい生産力向上を果たしたため、その方面からの移入が増加したのではないかと考えられる。また、10aあたりの荒茶生産量

表1 横浜港からの茶の輸出货量と金額

	総輸出金額	生 糸			茶		
		数 量	金 額	比 率	数 量	金 額	比 率
	千ドル	ピクル	千ドル	%	ピクル	千ドル	%
安政6 (1859)	400						
万延元 (1860)	3,954	7,703	2,595	65.6	23,852	308	7.8
文久元 (1861)	2,683	2,685	766	62.2	16,266	206	16.8
2 (1862)	6,305	3,617	985	81.0	15,231	168	13.8
3 (1863)	10,554	19,371	8,717	82.6	42,066	505	4.8
元治元 (1864)	8,997	12,701	6,223	69.2	—	413	4.6
慶応元 (1865)	17,468	16,235	14,612	83.6	59,248	1,777	10.2
2 (1866)	14,100	9,381	7,036	49.9	50,070	1,502	10.7
3 (1867)	9,709	6,954	5,215	53.7	53,941	1,618	16.7

石井孝：『幕末貿易史の研究』第5表、第18~27表による。

文久元年の生糸・茶の数字は上半期のみ。その総輸出額は1,231千ドルであり、比率はそれに対する比率。文久2年の生糸・茶の数字は上半期の英国船による分のみ。その総輸出額は1,216千ドルであり、比率はそれに対する比率。

表2 明治前期における生糸絹織物類と茶の輸出現

	総輸出額	生糸絹織物類		茶	
		千円	%	千円	%
明治元~5 (1868~72)	15,599	8,874	56.8	3,819	24.4
6~10 (1873~77)	22,124	10,170	45.9	5,720	25.8
11~15 (1878~82)	30,268	13,077	43.2	6,655	21.9
16~20 (1883~87)	41,714	17,708	42.4	6,821	16.3
21~25 (1888~92)	70,600	29,372	41.6	6,633	9.3
26~30 (1893~97)	124,009	43,169	34.8	7,848	6.2

三瓶孝子：『農家家内工業の変遷過程』による。原資料は『大日本外国貿易五十六年対照表』

表3 茶栽培面積と荒茶生産量

年	面積 (ha)		荒茶生産量 (t)		10aあたりの荒茶生産量(kg)	
	全国	宮城	全国	宮城	全国	宮城
明治16~20			22323	120		
21~25			27018	87		
26~30	58767	241	30889	90	52	37
31~35	52305	326	27883	83	53	25
36~40	49631	267	26131	40	52	14
41~大正1	48282	199	30999	34	64	17
大正2~6	48275	108	35218	40	72	37
7~11	47176	99	36853	27	78	27
12~昭和2	43508	89	36639	19	84	21
昭和3~7	39778	62	39168	19	98	30
8~12	38979	53	47035	15	120	28
13~17	39108	40	58670	12	150	30
18~22	28190	15	29722	4	105	26
23~27	27567	11	40290	3	146	27
28~32	38828	25	68054	10	175	40
33~37	48118	47	78096	37	162	78
38~42	48660	55	82020	56	168	101
43~47	51940	40	90736	29	174	72
48~52	58840	39	100853	20	171	51
53~57	60740	31	101160	13	166	41

は宮城県では全国の1/4程度にとどまっている。これは宮城においては気候の関係から2番茶までしか摘採されないため、4番茶まで摘採される所に比し生産量は低くなっている。

そこで生産農家は、有利な作物へと転換をはかったと思われる。また、42年頃から開田ブームで畑もみな田へ転換していたのでその影響もあったと考えられる。

次に江戸時代の主要産地であった黒川地方の茶と、現在県内の唯一の産地となっている桃生地方の茶について述べる。

② 黒川の茶

藩政時代『奥道中歌』(1819)の書き出しにも「国分町よりここへ七北田よ富谷茶のんで味は吉岡」とあるように、富谷から吉岡にかけての黒川郡が茶の主要な産地として知られていた。この地は仙台市に接近しており、黒川盆地のほぼ中央に位置している。

『安永風土記書出』によれば黒川郡には表4のような茶畑があった。即ちこれらを集計した195貫531文が年貢高であった。但し、こ

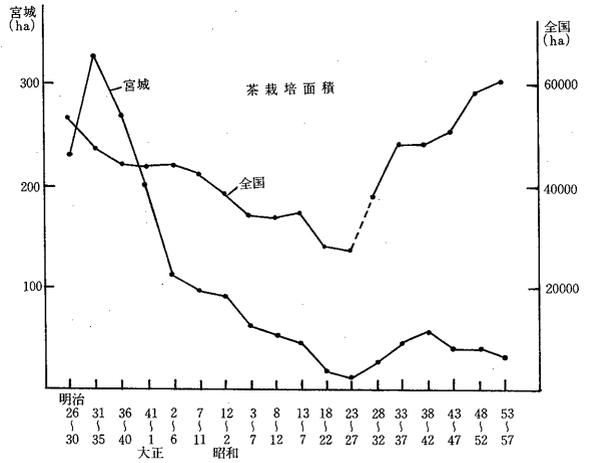


図2 茶栽培面積の推移

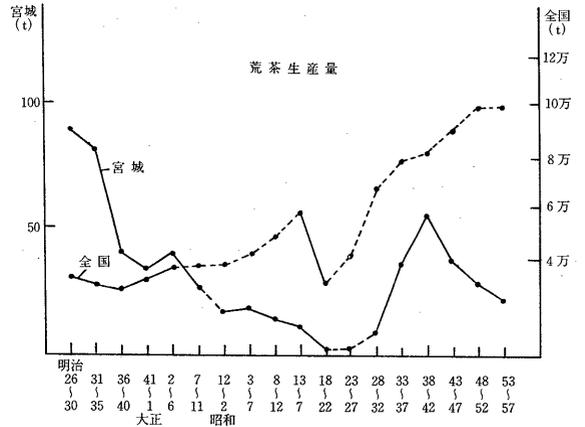


図3 荒茶生産量の推移

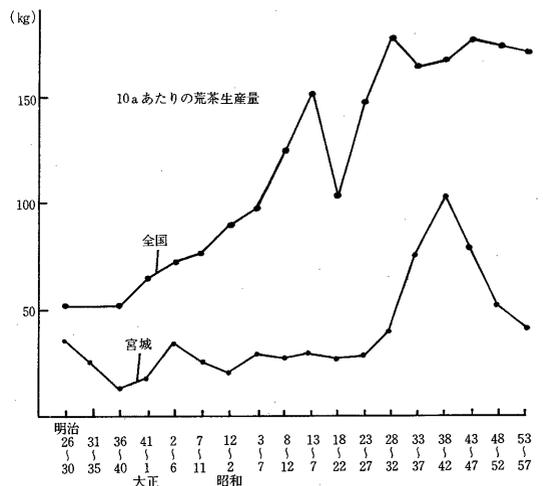


図4 10aあたりの荒茶生産量

表4 黒川郡の茶畑

村名	茶畑	村名	茶畑
富谷	貫文 44,370 (65)	宮床	貫文 34,138 (50)
明石	10,234 (50)	鳥屋	1,536 (34)
石積	2,140 (24)	松板	6,789 (47)
穀田	8,542 (63)	山田	757 (24)
大亀	4,896 (46)	一関	7,406 (58)
二関	4,449 (38)	今	3,778 (12)
三関	352 (4)	小野	22,135 (63)
下草	174 (1.4)	大童	2,342 (35)
志戸	62 (1.4)	北目大崎	2,627 (13)
高田	1,136 (6.4)	大田	885 (17)
幕柳	4,511 (56)	報恩寺	408 (0.03)
大平	2,207 (11)	小鶴沢	1,015 (21)
吉田	13,478	石原	382 (5.6)
成田	14,732 (61)	合計	195,531

()内は畑作のうち茶畑の占める割合％
 (「安永風土記書上げ」『宮城県史』24より)
 註：但し藩直轄地のみ

こにあげられている茶畑は藩直轄領地に関するもので、このほか藩士知行地の畠地にも若干の茶畑はあったと考えられる。仮に藩士知行地の畑作を0と考えると、全体の畑代のうち茶畑の占める割合は多い所では65%にもなっている。⁵⁾

仙台地方における茶樹の栽培を最初に記録しているものは、『黒川之内駒場検地帳』である。

駒場は江戸時代の駒場村で、現在は黒川郡大衡村の一部をなしている地域である。

検地帳は天正18年9月20日の日付をもち、検地は伊賀守之内、飯高、矢田という役人によって行われている。名請人は41人が登録されている。耕地は49町6段5畝17歩でその内訳は、上田11町3畝15歩、中田11町4畝10歩、下田13町5段8畝18歩、上島9町9段1歩、中島5町4段2畝23歩、下島3町6段6畝10歩となっている。

表5は茶畠を持っていた名請人の耕地面積を示したものである。

当時の茶畑は全耕地の0.7%にあたっている。きわめて少ないが、茶がつくられていたことが立証できる。茶樹の栽培は最初は畑地

表5 名請人の茶畑

名請人	茶畑面積
雲泉寺	(上) 7畝 (5反6畝)
佐藤兵衛	(上) 5畝 (4反9畝余)
宗右衛門	(上) 3畝 (1反5畝余)
にいほり	(下) 1段 (5反9畝)
肥後	(中) 1段25歩(7反4畝余)
計	3段5畝畝25歩

()内は全畑地
 『宮城県史』30 (1965) より
 註：当時1段=360歩

の作物というより、宅地内に植えて自家消費のためのものであった。

黒川郡誌によれば、昭和初期までに黒川郡内で製茶業の中心となっていたのは、吉岡・富谷地区であって、富谷には代表的なものとして、熊谷字源内屋敷、渡辺正治祖先が製造したもので、仙台及び各郡村に売り出していた事実がある。特に寛延4年、藩主伊達家に膳用として杓把茶、五加茶等の製造を命じられ、以後これを献納したが、明和8年藩命により献品製造を中止した。⁷⁾

当時商売の茶銘は次のようであった。

はっしも、かんさし、たつの爪、くきなかつみかがみ、はつね、まかき、T子頭、真切葉茶

吉岡では、上町菅原篤平治の製造による献納品、千鳥、角文字、政所の三品が宝暦11年藩命によって伊達家に買い上げとなった。また、明和年間、九条左大臣に五品を献納し、五色の銘および直書の和歌をうけている。

五色の銘…春風、かほり、4世、花の浪、末の松

和歌……春風の香ほりもここに千代かけて
 花の浪こす末の松山

その後、但本土佐により茶業の奨励が行われた。文久年間に男沢清之進を山城国宇治に送り茶の製法を勉強させ、彼が帰藩してこれを広めた。これが上林流である。但本土佐は仙台北屋敷、片平丁下屋敷、小田原牛小屋町吉岡館内に茶園を開きその製法を行わせ、又

表6 吉岡における茶の生産量

年	面積	生産量			合計
		玉露	せん茶	番茶	
明治17年	320 a	34.8kg	1136kg	281kg	1452kg
26			487	315	802
35			540	225	765
44			682	97	780
昭和4年	85 a		630		630

宮城県史24より

家臣にも屋敷内に茶樹を植えさせた。⁷⁾しかし前述のように領内の需要をみたす程度であった。

明治初年、吉岡、山崎と合わせて360kgの産額をみている。しかしその後、茶樹を倒して桑樹を植えるようになり、その衰えが見えて来た。

大正初年になると吉岡で自家用として茶を製造している家が450戸、副業として販売している家がわずか2戸となった。郡内産出の茶は375貫(1406kg)で、この仕事に従事する者は105戸となっている。

明治、昭和の吉岡における茶の生産量は表6の通りである。尚、現在はこの黒川地方では茶の栽培は行なわれていない。

③ 桃生の茶

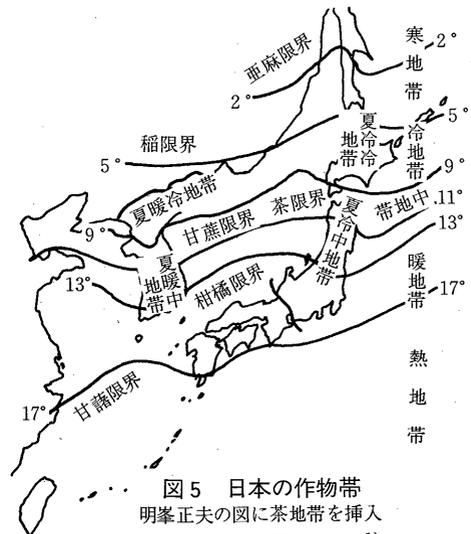
桃生は宮城県東部の桃生郡の北端で、石巻から21キロメートル、仙台から74キロメートルのところに位置し、北上川の旧流路と新流路にはさまれた低平な沖積地をなしている。産物は米が主で、他に畜産も行われているが、農業以外に盛んな産業はなく、人口も1万余りの小さな町である。¹⁾

桃生郡は藩政時代から北上川沿いに茶樹が植えられ生産が盛んであった。現在宮城県において茶が商業用として生産されているのは、この桃生郡だけであるが、これは藩政時代から継続していたものではなく、昭和33年頃から「鹿島茶園」の祖、佐々木忠氏によって再興されたものである。桃生は前述のように藩政時代から茶の産地であったことや、昭和30年頃から農業普及所及び桃生町役場で茶作り

を奨励したことなどにより、茶作りの再興に取り組んだのである。しかし、早魃や寒害等の悪条件が続き困難な状態であった。それにも屈せず研究を重ね、挿木法を考案して5年余りの後に成功した。その後も害虫、雪害、風害、干害など様々な悪条件を克服しながら今日に至っている。

桃生は北緯38°30'40"、平均気温11℃、年間雨量500~800ミリで、茶樹生育の気象条件である年平均気温12.5℃~13℃、年間雨量1500ミリを下まわっているが、このような土地で茶の栽培を再興するには想像を絶する苦労があったと思われる。

茶の経済的適地は茨城・新潟を結ぶ地域以南とされていたが、実際には図4のように照葉樹林地帯を含めた更に北部までの地域で生産されている。近年は照葉樹林地帯の北限である岩手県南部や宮城県桃生町に茶園が現存しているため、これらの地方が経済的北限と考えられている。¹⁾



現在、桃生茶は静岡の品評会でも一位をとる程、品質が向上した。鹿島茶園では現在、「やぶきた」7割、そのほか「さやまみどり」「桃生かおる」など15種の茶樹を栽培してい

る。生産量は少なく、生葉で4トンに過ぎないが、摘採は手摘みにより丹念に行われ、品質のよい茶を製造している。

この茶園の特徴としては、風、西日よけのための杉が植えてあること、雨量の不足を補うためのスプリンクラーの設置、冬季の低温から茶樹をまもるために大量のワラで覆いをするなどがあげられる。

桃生茶の特徴は風味が非常にまろやかであることがあげられる。これは北上川からたちのぼる霧と寒冷地のため二番茶までしか摘採しないので長時間かけて茶樹に養分が蓄積することなどに起因するものと考えられる。茶の摘採は毎年5月20日前後から行われ7月10日までに二番茶を摘み終える。寒さの為に虫はつきにくく、消毒の回数も少ない。

次に桃生の茶生産農家数と生産量を表7に示す。

表7 桃生における茶生産農家数と生産量

	農家数	生産面積	生葉量	製茶量
桃生茶 生産研究会員	18戸	260 a	8 t	1.6 t
生産農家	130戸	370 a	12 t	2.2 t

宮城県史26より

表にみられるように生産農家も少なく生産量も少ない。これらの茶は自家用として栽培されているものが多く、屋敷内に植えている茶を摘採して工場へもちこみ製茶してもらい農家がかかり多い。生活の中に茶が密着しているという様子がうかがえる。昔ながらの素朴な桃生茶の味は高級な宇治、静岡等の茶を賞味するのとはまた異なった趣がある。

4. 考 察

茶の経済的北限といわれる宮城の茶について述べてきたが、気候条件が茶の生育のために決して良好とはいえないこの地方に茶が発達した大きな原因は仙台藩の政策にあったといわれる。

茶種は中国から輸入されたものと、日本にも自生していたものが存在するという説があるが、照葉樹である茶樹が照葉樹林帯の北限であるこの地にも自生していた可能性は十分考えられる。

しかし、明治初年に茶の生産が全国で第4位になったきっかけは、政宗が産業振興の一端として、宇治から茶種子を求め、その栽培を各地に奨励したことによるものである。⁶⁾

初代仙台藩主伊達政宗は62万石をひきいる優れた武将である反面、和歌、古典、能、茶道をたしなむなど文化にも造詣の深い人であった。慶長18年(1613)南蛮との通商を企画し、幕府の支持のもとに支倉常長をメキシコ、スペイン、ローマに派遣したが、幕府の鎖国政策が進行して発展をみることはできなかった。常長が帰国した元和六年(1620)ごろからは専ら仙台領の経営に力を注ぎ、漆、桑などの植栽をすすめ、領内検地を行った。茶樹もこの際に植えられたものである。

当時の作物としては茶は商品価値が高く、通商が発展すれば貿易品の一つ、あるいは外交の際の献上品として考えられた。

桃生町は北上川の流域にあり、藩政時代には北上川を上って平泉へ荷を運んだり、逆に下って石巻へ出て、そこから仙台まで特産物の茶を運んで献上したという記録も残っている。

その後、時代を経て仙台藩は幕末の戊辰の役の敗戦とその結果としての減封から、士族及びその他の旧藩士の生活の基礎は破られた。この更生のために士族授産の道が講ぜられた。その際、米・銅・鉄・漆器・紙その他があったが、何れも特記すべきものでなく、ただ外国貿易の影響で盛んになったものとして養蚕と製茶があげられている。¹⁶⁾

明治初年には宮城の茶生産量は静岡・京都・三重に次いで全国第4位の生産県になっている¹⁾のはこのような士族、その他の旧藩士更生のための政策の結果であると考えられ

る。

前述のような歴史を経て、現在県内で生産されているのは桃生茶だけになっている。

東北地方という一大消費地をかかえている上に、耐寒性品種の改良や栽培技術の進歩などにより、藩政時代のように県内各地で茶栽培を復活させるのは必ずしも不可能なことではないと考えるが、寒冷地での茶栽培の経済性、流通機構の発達に伴う現地生産の必要性等よりみて、昔のような大量生産の復活は行われまいであろう。しかし小規模でも地元の人々の手によって丁寧につくられている宮城の茶は、伝統ある食文化の一つとして今後も残って行くことを希いたい。

尚、今回の調査において文献や資料も乏しく、為に推測の域を脱し得ない部分もあるが、今後更に調査を進めて確実なものにしたいと考えている。

本研究を行うにあたり、御協力を頂きました鹿島茶園佐々木達氏、元農林省茶業試験場坂本裕先生並びに同試験場佐藤氏に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 大石貞男：日本茶業発達史，農山漁村文化協会（1983）
- 2) 泉敬子：生活科学研究第6集（1984）
- 3) 泉敬子：生活科学研究第7集（1985）
- 4) 下中邦彦編：世界大百科辞典，平凡社（1968）
- 5) 仙台郷土研究会編：仙台鹿の子，
- 6) 宮城県教育委員会編：宮城県史（1954）
- 7) 黒川郡教育委員会編：黒川郡誌（1924）
富谷町誌（1965）にも同一の記録がある。
- 8) 仙台市史編さん委員会編：仙台市史（1975）
- 9) 仙台市教育委員会：仙台郷土史（1933）
- 10) 総理府統計局：家計調査年表（1982）
- 11) 農林水産省農蚕園芸局畑作振興課：最近における茶の動向（1984）
- 12) 農林水産省統計情報部：茶統計年表（1984）
- 13) 菊地勝之助：仙台地名考：宝文堂（1978）
- 14) 日本庶民生活史料集成：三一書房（1976）
- 15) 宮城県百科辞典：河北新報社（1982）
- 16) 高橋富雄：宮城県の歴史，山川出版（1969）
- 17) 横浜市：横浜市史（1962）